

鬼師の世界

——黒地：杉浦彦蔵と窓庄——

高 原 隆

1998年6月6日にアメリカ民俗学者、ヘンリー・グラッシー教授（インディアナ大学）と共に旅した日本の古都、奈良で見た一般民家の屋根に触発されて始まった「鬼師の世界」の調査研究は2008年10月31日の今日に至ってもなお継続している。今回の対象となる鬼板屋は「窓庄」という。これまで様々な鬼板屋を訪れ、調査して来たが、「窓庄」は色々な意味において異色である。まず、そもそもの調査の始まりが依頼であった。愛知県高浜市は瓦の町であり、そこに「鬼みち案内人の会」がある。その会員である川角信夫さんが「三州鬼板師の系譜と作品」というものを作成されていた。その時、私とやり取りが少しあった。その関係からか、2007年10月5日にメールで「窓庄」について、その概要の通知が届き、さらにインタビューの依頼があった訳である。これまで依頼されてインタビューや調査はしたことが無く、少し戸惑ったが、考えた末、やってみることにしたのが事の起こりである。少し戸惑ったのは他にも理由がある。それは、「窓庄」は確かに鬼板師の系譜には入っているが、現在は既に廃業しており、これまで調査してきた「現役の鬼板師」の流れから外れている事が念頭に直ぐに浮かんだからであった。さらにもう一点引っかかった事がある。「窓庄」はその名のおり、鬼板師から文字通り外れていることであった。インタビューの直接の対象者

は杉浦彦蔵^{ひこじ}といい、屋根に取り付ける瓦製の天窓を作られていた人である。結果、考えた末、鬼板屋の変遷を調べるいい機会だと捉え直し、この依頼を受けたのである。インタビューを行い高浜に出向いたのは、2007年10月13日であった。高浜市役所で彦蔵さんの息子さん（杉浦敏晴）と落ち合い、直ぐ近くにある杉浦家へ案内してもらった。そこは「まど庄鉄工所」となっていた。つまり、家業は既に天窓から鉄工所へと大きく様変わりをしていた。しかし、通常の鉄工所とは違い、プレス用の金型をも製作しているいわば現代プレス瓦の大本の一つであった。つまり杉浦家は瓦産業の世界で変貌を繰り返して来ている家系といえる。ある時は、瓦屋、ある時は鬼板屋、またある時は天窓屋といった具合である。

杉浦彦蔵：窓庄の始まり

杉浦家が瓦屋を始めたのは杉浦彦蔵の代に遡る。二代目窓庄杉浦彦治から数えると、三代ほど昔の事になる。彦治から見ると彦蔵は曾祖父に当たる。彦蔵は新家^{あらや}として出て、新しく瓦屋を始めている。元々の本家は「くど屋」であった。竈^{かまど}作りが仕事だったのだ。彦蔵はまず旅職人として、色々な所をまわって仕事をしながら修業していたようである。彦治は次の様に言っている。

まあ、わしがた、あの、ちーちやい時に死んでらしたもんだい、はっきり分からんけどな。

昔は、あの、旅へ出てな、旅ってって。信州とか、あーゆーとこへ行って、あの工賃が良かったもんだいな。ほいで、あの一、陽気のいい時はそういうとこで、職人して来て、ほいで寒い時は仕事が出来んもんだい。なんしょ、いくらコモで囲ってっても、凍てちゃうげなでなあ。ほんで寒なると、こっちへ来て、こっちで、何かやっと思ったけどな。

ほんで、その内に、ま、ここで落ち着いたんだな。

彦治の窓庄はこの杉浦彦蔵が始めた瓦屋を本屋とする新家である。その彦蔵は天保8年(1837)に生まれている。亡くなったのは昭和2年10月13日で91歳であった。いつ頃に彦蔵が瓦屋を高浜の春日町で始めたかは正確には分からないが、仮に30歳とすると、1867年、つまり慶応3年となる。江戸時代の最後の年にあたる。翌年は明治維新である。これによっておよその時代背景が推測できる。彦治はその本屋があった昔を次のように回想する。

在所が直ぐ前の道を行った突き当たりが、この下が、あの、昔、港だったもんだいな。ほいで、あの、ポンポン船に横付けで、荷を積みよった。(第1図参照)

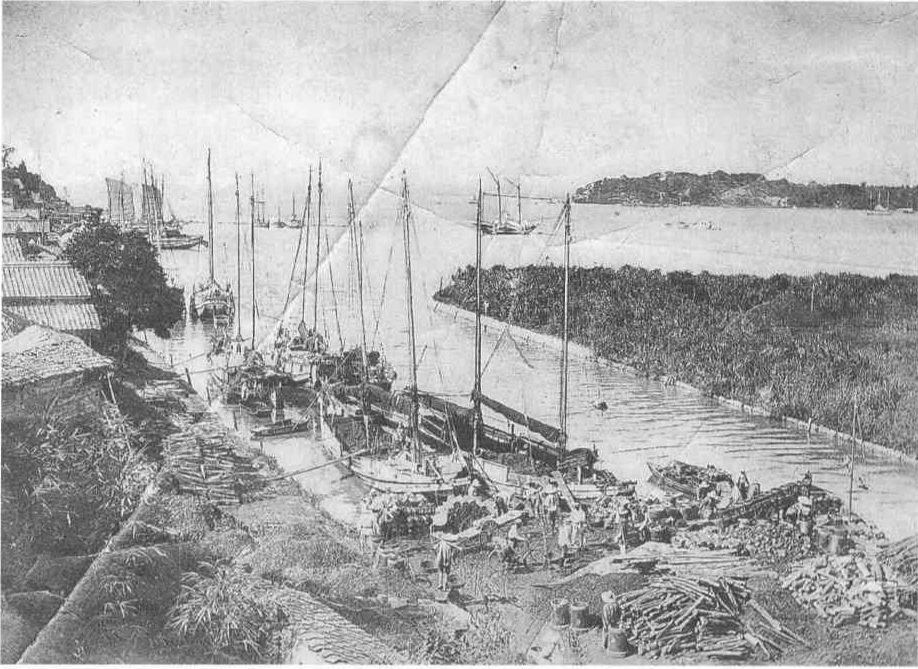
彦蔵は旅職人を終えて瓦屋を始めるにあたり、重い瓦を運搬しやすい場所として港の直ぐ近くに居を構えたのである。当時の運搬手段は荷車か船であった。船は紀州から「焚き物」と呼ばれる薪、木の葉、松葉、石炭などの主に土管や瓦の燃料を運んで来た。その帰

りの空船に、高浜で製品となった土管や瓦や鬼瓦を載せて、伊勢、豊橋、遠くは関東までも回航していた。ただ現在はこの辺り一帯は埋め立てられ、昔の面影は殆ど無い。(第2図参照)

彦蔵は瓦屋としてかなり成功したらしく、職人が14、5人いて、働いていたという。屋号は四角い枠で囲んだ「杉浦彦蔵」(タテ)という印を製品に押しつけて使用していた。また、彦蔵は美濃・尾張地震の時に瓦屋としてひと財産を形成したという。これは明治24年(1891)10月28日に発生した日本史上最大の直下型地震で、濃尾地震とも呼ばれている。震度は推定で、M8.0ともM8.4とも言われている。被害は岐阜県、愛知県はもとより、滋賀県、福井県にも及んでいる。死者が7273名で、全壊家屋は14万2177戸となっている。この全壊家屋の数の多さは一般の人々にとっては大災害を意味するが、瓦屋にとってはいさなり巨大マーケットが目の前に現れた事になる。高浜の瓦屋、鬼板屋はこの時期、一気に潤った事になる。杉浦彦蔵も例外ではない。仕事そのものが元々現金収入である。彦治よると、彦蔵は余剰になった現金をさらに運用し、近郊の農民に貸していたという。農民が返済できなくなると、抵当に入れていた田地が充てられた。彦治はその様子を次のように語っている。

ま、金があったもんだん。ま、昔の高利貸しっていうだかな。それで貸しとってな。

ほいで、ま、百姓なんか金借りると、ま、なかなか現金収入というのは無いもんだいな。ほいで、あの、秋のとりえ(穫り入れ)が済むと、「やい、あそこの田んぼが貰えたで、落穂拾って来い」って言うもんだん。方々の田んぼへ行っとな。手で刈るもんだん、どうしても穂が



第1図 高浜港（土地の人は「港」と呼ぶ）
土管等の舟積み風景 大正10年頃



第2図 初代杉浦彦蔵瓦工場（本家と旧高浜港（写真上部分））

落ち取るもんだん。紙袋いっぱい拾って来よったけどなあ。

「何で田んぼがもらえただなあ」なんて子供だったら、わからへんもんだい。

ところが、大東亜戦争後、そういった状況に対して、どんでん返しが起きたのである。

あの、戦後は、あの、何て言うだ……。農地改革でなあ、小作の方々が安う貰いさった。

彦治が語ってくれた杉浦彦蔵の経済運営の仕方は決して特殊ではなく、現金収入が基本の瓦屋や鬼板屋では普通に行なわれていたものと思われる。それ故、「鬼板屋は旦那衆が多い」と言われるのかも知れない。この言葉はよくフィールドワークをしている時に耳にした。

二代目杉浦彦蔵

杉浦彦蔵の二代目は杉浦曾根松である。彦治の祖父である。曾根松は明治10年(1877)生まれであり、昭和24年(1949)に亡くなっている。72歳であった。彦蔵の時は瓦専門であった。しかし、曾根松は手が器用だったのか、鬼板師になった。彦治の曾根松の話である。

利口な人だったかな。利口で器用だもんだん。あの一、鬼板の方始めてな。

ほーすつと、ひと屋根受けると、全部、瓦から鬼から皆自分のもんで間に合うもんだいな。

つまり、曾根松は瓦屋でありながら、鬼板屋をもやり始めた事になる。しかし、曾根松は

旅職人になったわけでもなく、また、何処かの鬼板屋へ小僧として入った訳でもなかった。曾根松は同じ町内、春日町に在る鬼板屋の鬼源の元へ通ったのであった。鬼源は高浜で最も古い鬼板屋と言われている。そこの初代、神谷春義に鬼板の作り方を習ったのである。しかし、普通はなかなか外部の者には教えない技術であり、そういう習慣であった。まして明治時代のことなので、他人が鬼板師になるには小僧として修業する他は手段は殆ど無かったと思われる。ところが曾根松は立派な鬼板師になっている事からして、鬼源は瓦屋の「杉浦彦蔵」と何らかの仕事上の強い繋がりがあったものと思われる。彦治は次の様に言っている。

瓦屋の出で、ほいで、二代目の曾根松さんが鬼源さんに教えてもらって。鬼を……。

私が「曾根松さんは鬼源さんの職人さんになったという事ですか」と問うと、彦治は以下のように答えた。

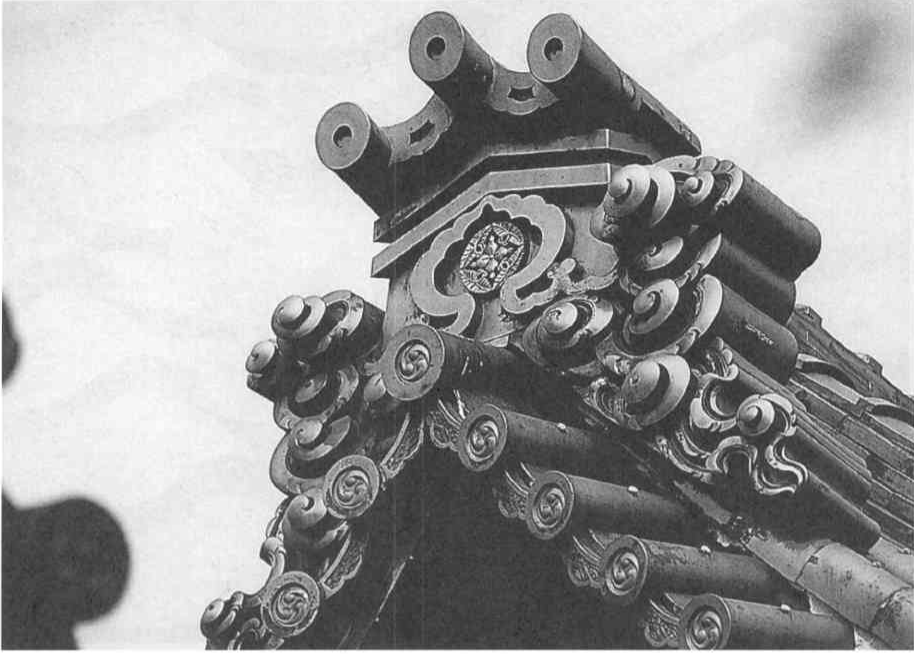
なっていない。

友達だもんだい。

鬼源さんから言うと弟子だ。(笑い)

曾根松は根が器用なのであろう。そして鬼源の親しい友達であり、さらに、瓦と鬼瓦の売り買いも互いにしていた仲だと思う。「どうして習ったのか」と言うと、彦治は次の様に話してくれた。(第3図参照)

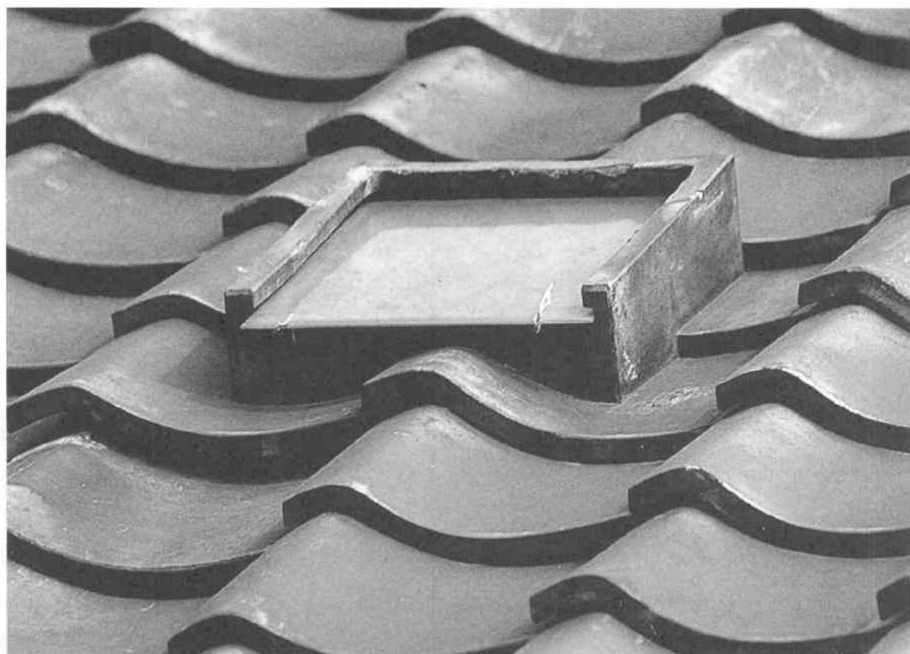
うん、見本があるもんだいな。あの一、焼いたやつがな。ほいだで、見様見真似で。難しいもんは、「どうやってやるだ」って。近くだもんだん。



第3図 経ノ巻吹流足付 杉浦曾根松作 春日神社拝殿（高浜市）



第4図 天女の舞 杉浦曾根松作 蓮乗院（高浜市）



第5図 天窓（杉浦彦治家の屋根） 杉浦彦治作

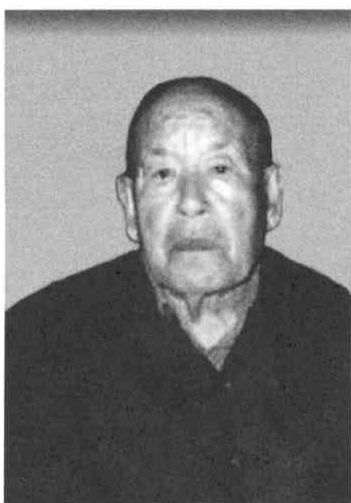
もちろん彦治も実際に曾根松が鬼板を鬼源で習っていた頃の様子は知らないはずなので、はっきりした事は今の段階では分からない。ただ鬼源の神谷春義と杉浦曾根松が特殊な間柄であった事は確かである。また残っている鬼瓦から見ても曾根松の作る鬼瓦が鬼源の鬼瓦と同系統のものである事は明白である。つまり、鬼瓦が「鬼面」ではなく、「経の巻」系なのである。しかし、曾根松は本当に器用だったらしく、細工物で「生き物」と言われるものも残している。現在残っているもので分かっている鬼瓦は春日神社拝殿の経の巻である。また、生き物では高浜市役所の向かい側にある蓮乗院の「天女の舞」などがある。（第4図参照）

また曾根松は父、彦蔵同様に家業を盛り立てたらしく、町会議員に2回なっている。旧高浜町が現在の高浜市になったのは1970年12月1日の事である。杉浦家が最も勢いがあった時代である。このように、公私とも活躍した曾根松であるが、さらにもう一つ重要

な事を成している。「天窓」の発明である。当時の日本家屋は家の内部が全体に暗く、さらに、くど（竈）で煮炊きをしていたので、煙が部屋に流れていた。それに目を付けた曾根松は、瓦製の天窓を屋根に取り付けて、「明かり取り」と「煙抜き」の工夫をしたのである。曾根松の天窓は急速に広がったらしく、戦前に既に6社が天窓製造、販売をしていた。いわゆる「窓庄」の発端がここに生まれた事になる。このように曾根松はただ単に手先の器用な職人であるだけでなく、家全体または日本家屋全体を視野に入れながら物事を考えるかなり頭のいい人だったように思われる。「用」と「美」を同時に追及した人とも言える。（第5図参照）

三代目杉浦彦蔵

曾根松の元に二人の兄弟が出、事実上「杉浦彦蔵」のあとを二人が継いでいる。兄の杉浦義正と、弟の杉浦庄之助である。そして三



第6図 三代目杉浦彦蔵 (杉浦義正)

代目杉浦彦蔵となったのは兄の義正であった。彦治から見ると叔父に当たる。曾根松の工場で職人と一緒に義正と庄之助は働きながら修業した。義正はとても器用な職人だったと言う。(第6図参照)

あの、何て言うかな。いろんな、あの一、役瓦っていうのかな。色んな鬼板はもちろん、色んな、作る名人だったな。よー見ると、へらで磨いて仕上げるだけど、ほーや一、あの、器用な人だった。

まあ、仕事一本だな。しょっちゅう、子供ん頃見とる。

ほいで、この義正さんの嫁さんが大垣屋の、あの一、瓦屋から嫁しておいどるもんでなあ。ほいで、ま、在所の方が一軒、あの、受け持つと、ほーすると、それん、天窓から鬼全部売るもんだんな。

この話をしながら彦治は昔の自分自身の記憶を語り始めるのだった。

そう言う物を、あの一、車引きってっ

て。あの、大八車で引くおばさんら等が、あの、しょっちゅう行き来しとるだけど。

おばさん方の都合の悪い時には、「やい、持ってってくれよ」って子供の頃に行きよっただ。ほいたら、このお祖父さんが、「ご苦労さん、ご苦労さん」ってって、昔の事だ、一銭しか小遣いもらえんやつを、あの、五銭くらいおくれただ。ほいで、あの一、新聞紙に切ってやって、ほいで、財布なんあやへんもんだい、包んで、直ぐ、一軒前が駄菓子屋だったもんなんな。ほいで、飴なら5つ6つ買えよったもんだいな。一銭でな。

ほいでで御の字だ、五銭もらや。(笑い)一銭で飴がこんな奴が5つ6つも買えると、まあ、2、3時間しゃぶとる。(笑い)

距離にして4、5キロを子供たちが手伝いがてら、重い大八車に鬼瓦を乗せて運んでいた事になる。そして義正が何を作っていたかを尋ねると彦治な次のように言った。

鬼。鬼。まっ、専門かな。

鬼とは鬼瓦の事である。ただ大きく分けると鬼面が付いているものと、鬼面以外のものとに二分される。鬼の顔が付いているのか再度聞いてみた。

それが鬼面というんだけど、これが普通の鬼瓦だな。これが普通の細工だな。

「経の巻」タイプかと聞くと、

ほーだな、こういうもの。そうそう。



第7図 ^{フクロツミ}覆躰足付鬼 杉浦義正作 杉浦敏晴撮影

つまり、鬼源の流れを受け継いでいる事が分かる。経の巻中心の鬼瓦を義正は主に作っていた事になる。そして、生き物は殆ど作らず、もっぱら鬼瓦を製作していたと言う。「鐘馗さんの様な物はどうですか」と聞いてみた。(第7図参照)

うーん。作ったことはねえな。

うん、鬼専門だな。

窓 庄

一方、弟の庄之助は新家となり独立している。この時、庄之助は「窓庄」と屋号を名乗り、現在の杉浦彦治の住む屋敷に天窓用の達磨窯を作ったのである。兄の義正は鬼板師として「杉浦彦蔵」を継いだのに対し、弟の庄之助は、何人かの職人を連れて、天窓を受け継いだのである。ここに曾根松が始めた「鬼板屋」兼「天窓屋」が、庄之助の独立を機に

それぞれに二分された事になる。それゆえか、庄之助は鬼板師でありながらも、独立してからは鬼瓦は殆ど作らなかったと言う。庄之助の分家に際して、父曾根松、兄義正と弟庄之助の親子の間で何か約束事をしたのかもしれない。庄之助を父に持つ彦治はつぎのように言っている。

親父も、どっちかゆーと、細工もんがメインだもんだいな。ほんだで、鬼はあんまり作っとらんかったな。獅子、牡丹、ほれから、鷗尾とかな。そうしたもの。あの、鬼の、何だ、屋根の両隅にな。

ま、ほとんどがお寺専門かな。

庄之助は独立の際、連れて来た職人に、天窓を作らせ、庄之助はもっぱら細工物を作っていたのである。

戦前は、戦時中か、職人さんも置いたも



第8図 鐘馗 杉浦庄之助作 杉浦彦治家の屋根（高浜市）

んだん。あの一、それ全部まかせっきりで、自分は、あの一、そういうな、細工もん、ま、鐘馗が多かったかな。

石膏型があつてな。ほいで、押して、ま、このくらいのやつな。ほいで、ほいつを粘土をこうして押して、親父が仕上げするでな。なかなか仕上げは難しいもんでな。

高原：「その鐘馗さん、石膏型のいわゆる原型なんですけど、誰が作られたんですか」

うーん。親父。

ほいで、鬼板師は、全部な、あの、石膏買って来て、ほいで、溶いて、作るだよ。

家の親父はしよっちゅう、あの、そういう細工もん作っちゃー、最初のやつを、

あの一、石膏を溶いて、あの一、作って。丸型でな。

高原：「お父さん、鐘馗専門に作ってたって言われるんですけど、鐘馗以外には作られなかったんですか」

鐘馗専門。

理由はやはり相当の需要があったからである。当時、尾張地方には屋根の上に鐘馗を載せて、厄除けや魔除けとして使っていた。(第8図参照)

尾張方面。あっちが、そういう御幣担ぐって言うだけどな。よその鬼が玄関覗くと縁起が悪いって事で、二つ三つ必ず上げよった。

ほいだで、作っても作っても出よったもんな。

窓庄は天窓も作ったが、鐘馗も作った鬼板屋であった。一般の鬼板屋から庄之助の時にかなり変容した事がわかる。鬼板屋の主力である鬼瓦が欠落している事がその理由である。そして庄之助自身は棟飾りと言われる役瓦をもっぱら作ったのである。その中でも専門としたのが鐘馗ということになる。その鐘馗の説明を製造元である彦治は再度次のように言う。

昔はこの鐘馗が縁起もんでな。あの一、外から玄関から、あの、よその鬼瓦が覗くと、鬼が覗くって、嫌がって。ほーせると、家もあがとるだけど、鬼を載せる。ほいで、鐘馗を載せて、鬼を睨めて。

鎮めるといふだかな。そういうこと。ほいで、この辺りは割りに使わんけど、尾張の方に行くと、一軒の家で、二つも三つも載せとるでな。あっちからもこっちからも。

ほいで、ほいだもんだい、わしがた、そういう窓というより、そういう鐘馗を作るのが専門だったな。

このように、庄之助だけでなく、彦治も父の後を継いで鐘馗を作っていたのである。ところが戦時中になると、窓庄は製造を中止する。製品の需要が無くなったのだ。

戦時中に天窓が出んようになって、え一、まあ、工場も納屋も天窓で一杯になっちゃって。で、あの一、金丸という土管屋がな、あの一、耐火煉瓦を始めたもんで。

ほんで、そこへ使ってもらいにな、窯焚きで行って。昔は、あの一、家でゴロゴ

ロしとると、徴用で豊川の火焰工廠とかあーゆーとこへ引っ張られちゃうもんだいな。で、ほんなどこ引っ張られると、どーもならんもんだんな。

ほんで近くだもんだん、自転車で通って。

庄之助は天窓が出なくなった事と、徴用逃れのために土管屋である金丸に働きに行っていた。そこでは手先の器用さを買われて異形型煉瓦を作っていた。

あの一、耐火煉瓦のな、異形煉瓦ってって、溶鉱炉の口の所かな。色んな形のやつが注文が来るもんだい。それを親父が作っとった。

普通の何のやつは機械でパシャンパシャン抜けるだけどな。色んな、あの、大きさの、こんな大きなやつもあったけど。そうしたもんが注文が来ると、も一、型が出来やへんもんだい。親父が手作りで。

彦治は天窓が戦争中になくなった理由を話してくれた。

18年かな、(政府の方から) やめろじゃないけど、あの一、「空襲警報で明かりが夜漏れるでいかん」でってなってな。

ほいだで、製品が売れんようになった。

ほや、あの一、空襲警報のたんびに、あの、上登ってなんて出来んもんだい。ま、筵なんかで天窓囲って。ほんな様なもんだなあ。

昔の人は戦時中は哀れなもんだな。ほや

一、あの、軍需工場の者は景気が良かったけどな。

庄之助は天窓と鐘馗を主に作る窓庄を始めたわけだが、特に「生き物」を作るのが得意だったらしく、大型の作品をかなり手掛けており、野外用として注文を受けては作っていた。現在、庄之助亡き後（昭和41年6月14日）、庄之助を偲ぶモニュメントとして残っている。一つ戦前で代表的なものが、旧満州国撫順^{ぶじゅん}に建てられた撫順神社の境内に置かれていた一對の土管焼きの獅子である。これは昭和7年（1932）頃納めたものと言う。（第9図参照）この像については彦治と息子の敏晴はずっと気にかかっていたらしく、私に現在の中国で撫順神社がどうなっているのか調べてほしいと頼まれたのである。愛知大学で教えている関係で、何人も中国人留学生を知っており、その中には実際に私が持つクラスの学生だった人たちもいたので、ある学生（劉婉悦^{リウワンユエ}）に相談してみた。すると何と彼女は瀋陽^{シェンヤン}出身で、撫順^{フーシュン}は隣の街だという。それで夏休みに帰省した折に現地へ行って見てくれたのであった。しかし、撫順神社も獅子も既にそこには無く、市民が憩う公園になっていた。（第10図参照）

ただそれと同じ様式の獅子を昭和15年に高浜町（当時）の春日神社に庄之助の兄弟8人が寄贈している。これは現在も残り、実際に見る事ができる。この獅子も撫順神社のものと同様に土管焼きである。茶色ないし焦げ茶色の照りのある像である。庄之助は家（うち）で作り、三河高浜駅の西にあった森五郎作という親戚にあたる土管屋の窯で焼いて満州の撫順へと出荷したと言う。（第11図参照）

戦後になっての庄之助の代表作としては昭和30年に作った高浜小学校正門前^{まさしげ}に楠正成・正行^{まさつら}の親子像（楠公さんの桜井の別れのシーン）がある。現在は周りを木々に囲まれて見えにくくなっている。この楠公像にはいわれ

があり、戦前、庄之助の兄弟が還暦祝いで楠公さんの馬に乗った「銅像」をこの学校に寄付したのである。しかし、戦時中に金属製のものは政府の指示で供出する事が決定され、この像が学校から国へと動いたのである。（第12図参照）

供出で取られちゃったもんだい、台だけ残って、「何か作ってくれよ」ってことで、ほいで、馬は焼き物^{もん}で出来んもんだいな、足があるもんだいな。ほいで、何ていうだ、楠公さんの桜井の別れの……、

あそこの、ま、行って見たらいいけど……。

こういった話の後、土管焼きの大きな像の作り方を彦治は説明するのであった。

あの、鬼板師はな、大きな鬼を、あの、切ってな。細かく切って、ほいで、組んで作ったもんで。

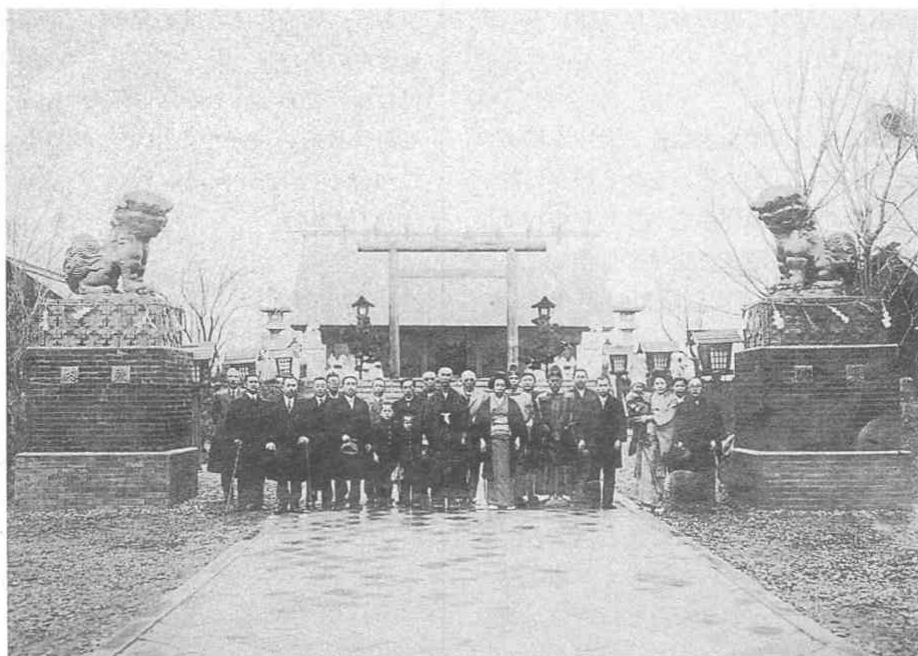
これも、細かく見てもらや分かるけど、これくらいの大きさにきっちゃー、張り、原型がこんなやつがモデルがあった。

ほいで、線引いて、細こう……。難しいだよ。

色、揃えにやいかんしな。

ほいで、土管屋さんの真ん中の一番ええところで焼かした。色がちゃんと取れるところだな。色がちゃんと揃わにや、見苦しいもんな。

銀色のやつは、大体、その、あの一、



第9図 獅子(土管焼) 杉浦庄之助作 満州撫順神社(満州国)



第10図 児童公園 中華人民共和国撫順市 劉婉悦撮影



第11図 獅子 杉浦庄之助作 春日神社（愛知県高浜市）



第12図 楠公像 杉浦庄之助作（高浜小学校正門）

1000度ぐらいか1100度ぐらい焼いたとこで、あの一、窯^{いば}中へ松木を一杯詰めて、ほいで、「^{いば}燻し」てってな、あの一、2時間ぐらい燻すと、ああいう風に銀色が付くわけだ。

ほいだけど、あの一、土管は、あの一、土管は1100か200くらいまで焼いて、ほいで塩を、岩塩ていうだかな、こんなものやつを、2、3べん焼べて、ほんで艶付けるていうだかな。

ほんで、釉葉なしで、あーゆー、ツルツとしたなあ、赤瓦の方だけど……、そう、塩焼き瓦と同じ式。

彦治は父、庄之助の事をこう語っている。

わしがたが一、子供の頃にふと目を覚ますと、夜中でも電気点けてやとったって事かなあ。

そして、庄之助が亡くなる頃の話が次であった。庄之助は67歳で亡くなっている。

親父が67か、67での一なったもんだいな。

親父がそんな根詰めて細工を作とって。わしがた、夜間、こっちから見えるもんだい。「まんだ電気^{てん}点いとる」、「まんだやとるとる」って。

そいで、お宮の獅子なんかな、こうやって、あの一、気が向くと夜中でもやる。

ほんだもんだん、若い時は丈夫で、医者にかかったていうことなんか無かっただけどな。無理がたたったじゃねえかな。



第13図 初代窓庄 杉浦庄之助

58、9で神経痛とリュウマチかな、両方が出ちやってな。ほれが交互に回って、手が悪い時は足が、足が悪い時は手が。手がいい時は、あの一、粘土持って来て、何か（笑い）やとったただけどな。

ほいで9年悪かったもんな。

次の彦治の言葉は庄之助の人柄を良く表している。（第13図参照）

はりゃー、人に好かれたな。真面目で。

仕事一本。

酒は飲まんし。

二代目窓庄 杉浦彦治

杉浦彦治は大正13年（1924）3月6日に生まれている。6人兄弟の長男である。小さい頃は下の兄弟の子守をしたりしていたという。

職人さんがおったもんだい、子供の頃は

工場には入らなただけど。

昭和13年(1938)に小学校卒業して、それから、あの一、工場に入ってやるようになったです。

彦治は小学校を卒業すると直ぐ庄之助の工場に入り、働き出したのである。当時、工場には3人職人が居て、全員が窓瓦を作っていたという。彦治は庄之助と仕事を始めたらしい。

家の親父が窓瓦と、ほれから、あの、鐘うち植さんていう、そういう物を石膏型で書いて(押して)、わしがおいて、親父が仕上げをする。

で、ほいで、窓の中に入れて焼くもんな。ほいだで、あの、何ていうだ、わしがたは、窓瓦とそういう細工もんと半分だな。

庄之助自身が鬼板師ではあったが、すでに鬼板をほとんど作っておらず、天窓と細工物だけを作るようになっていたせいか、理想的な年頃に窓庄に入った彦治は、鬼板の技術を全く継いでいないのであった。「長男に天窓だけでなく、鬼板師の技術も教えようとしなかったのですか」と聞いてみた。

ん、こっちもやる気はねえしな。(笑い)

これでもどうも釈然としなかったもので、もう一度、「杉浦さんに作れとは言わなかったのですか」と問うと……、

言わなかったな。(笑い)

見込みが無かっただ。(笑い)

ほんだで、わしは、まあ、ほとんど、天窓だけだな。

あの、職人さんがおった時分は、あの一、鐘植さんな。そういうの、主にやってな。

せがれは、まあ、不器用であかんと。(笑い)

このように彦治は自らを一方向的に卑下している。ただ、色々な鬼板師の現場を数多く見て回った経験から言うと、庄之助自身が何らかの理由ないしは約束を父、曾根松と兄、義正と交わし、鬼板を作ることを止めたのではないかと思われる。それ故、庄之助の工場の職人は天窓だけを作っていた訳である。庄之助だけが根が鬼板師という職人なので、細工物をもつばら作っていた訳である。そういった環境の窓庄に入った彦治は自ずと、環境に適応して行ったのである。他の鬼板屋では、多くの鬼板師から、子供の頃の思い出として、父、または両親が、さらには職人たちが鬼瓦を一生懸命作っている姿を見ながら仕事場で粘土と戯れて遊びつつ、無意識に「鬼師の世界」に馴染んでいった話を何度も聞かされている。ところが、窓庄にはそういった鬼板師が存在しておらず、彦治は年齢的には鬼板師になるには最適の時期に、窓庄に入ったにもかかわらず、鬼板師になる環境が無かったのである。言葉の習得の例がこの状況をより鮮明に説明してくれる。彦治の年齢だと、12歳頃である。この年齢から外国語を始めればとても有利である。しかし、もし環境がずっと日本国内であったなら、その外国語が母語並の自然な言語になる事はほぼ限りなく零に近い。生きた言語環境が存在しないからである。これと似たような事が彦治に起きたという事になる。

彦治は昭和19年(1944)に海軍に行つて

いる。広島の掃海隊に配属された。アメリカ軍が空襲に来て、瀬戸内海に落としていった機雷の掃海が任務であった。とても危険な仕事で、命懸けであったと思われる。

ほや一、あの一、機雷が爆はでるとすごいもんでなあ。200m 位離れたところで、同じように並んで走って、ほんで、わし非番だもんだい、ベッドで寝とったら、ドーンという音がして、背中痛いたったいくらいショックがあつてな。ほいで、うちの船がやられたと思って、そのまま乗っとりゃ、ズブーっと下へ潜ひつちやうもんだい。ほいで甲板の方出たら、うちの船ポコポコ走はつとる。

隣の船、電柱ぐれえの水柱が立たって、隣の船がやられてな。

ほいで、ほの機雷が泥ん中に潜ひつとったげなもんで、泥水。普通は白い、あの一水柱なんだけどな。ほいで、あの一、沈没せんだつたけど、中、泥まみれで。

ほいつが、ドロドロで、ま一、洗濯利きゃあへんで、ま一、ふて（捨て）たつて言いつとつたけどな。

インタビューする中で、やはり戦争体験は強烈な記憶としてあるらしく、彦治から様々な戦争の話聞いた。その中でも彦治の原爆体験は特別に印象に残っている。

わしがた不慮の兵隊だけど、あの一、「防空堀に、応援行け」つてつて、防空掘り手伝つとつた。

ほいで、出て来たらボカンだもんな。距離にしてどのくらいかなー。

彦治がその時いた町は広島の川尻であった。港町だったというので、現在の川尻町であろう。呉市にも市内に川尻町がやはりあるのだが、これは町内の名前である。地図で見ると、広島の中心部から直線で25km ほどの距離である。

海岸線にズーっと防風林て言うかな、こんな、あの一、赤松のな、あの松林があつた。ほいで助たかつた。無なかつたらもろにやられちゃう。

ちょうど出て来たら、あの一防空壕掘つて、ほいで、5、6人でトロッコで出て来たただな。外へ出たら、ドーンて。ま、ピカだ。ほいで目とられちゃつて、「なんだ、なんだ」つて大騒ぎになつちやつて。

ほや、この辺でピカッと光つて、ほいで、普通の爆弾と違つて、音もドーンと言う様な音で、ほいで、凄いキノコ雲で……。ほいで、ショックで腹を押さえるような爆音……。あの、ちょうど昔写真を撮るときのマグネシウムが……。あれ、あんな感じ。うん。

それから鼻血が良く出たという。髪の毛が抜け、眉毛さえも抜けた。

鼻血が出よつたな、顔洗つてな、ほいで、目つぶつて洗つとるもんだん。あの一、手ぬぐいで拭くと、真っ赤だもん。あれっ、て見ると、洗面器が真っ赤。

眉毛なんかもこうやつて撫でると5、6本抜けちゃう。

彦治が高浜へ帰つて来たのは昭和20年の暮れの事であつた。終戦から帰省するまでの間

は、今度はアメリカ軍の指令で、アメリカ軍が落としていった機雷の掃海の仕事を瀬戸内海でしていたのであった。しかし、彦治が戻ってくると、窓庄はとたんに活気づいたのである。

バタバタッと、倉庫が一杯にあって、あの一、天窓が一年で全部出ちゃって、問屋の方が、「はよ作れ」、「はよ作れ」って、あの一、せつつかれて、ほんでわしが始めて。

わしの弟が二人一緒に金丸に居ったけど、やめて、ほいで家^{うち}で、ま、家だけで、始めて。戦後始めて、天窓をな。

この時、彦治は21歳であった。戦争を境に彦治は本格的に天窓作りを始めた事になる。この時、庄之助は45歳であり、窓庄が本当に活気づき始めた時期だったと思われる。ところが庄之助は金丸から窓庄に戻り、本来の仕事は急速に増えて来てもマイペースで自分の仕事をしていたのであった。

天窓を始めてから、何かな、ま、親父が注文があると、獅子とか鷗尾とか、ちょっとやとったけどな。ほれと、あの一、狸とかな。頼まれてな。根が好きだもんだん。

天窓のほう^{ほう}が忙しいもんで、「断れ」、「断れ」って言っても、「うん、うん」て言いながら、(笑い)好きな事やってな。手作りだもんだいな。

戦後は本当に忙しかったようである。

まあ、この辺だと、ほとんど名古屋へ行^いったかな。ほれから、ま、トラック輸送が利いて、船で、あの一、伊勢の方までも

運んで。こんに、港があるもんだい。ボンボン船で、伊勢の方へ運んだり、ほれから、名古屋が主かな。

彦治は天窓について色々^{色々}と話をしてくれた。私自身は天窓は元々昔から在^あった物^{もの}と思^{おも}っていたが、そうではな^なかった。

わしのお祖父さん(曾根松)が勘考して作^{つく}った。

昔の家^{うち}は暗^くかったもんな。こんなサッシで、こう窓^{まど}なんて、無^なかったもんな。夜んなると、雨戸閉^しめて、昼間は、ま、障子があや、こういうな一、紙の障子をほめるような事^{こと}でな。

ほいでで、暗^くかったもんだん、一つずつ付^つけたかな。

つまり明^あかり取りと台所の煙を流す、または抜^ぬくために天窓を付^つけた事^{こと}になる。(第14図参照)

ほいでで、一軒建^たてると、煙筒窓が二つ三つと、ほれから暗^くいとこな、裏側^{うら}は、暗^くきや、裏側^{うら}へはめるとかな。ほいでで、何とか手^て作りだもんな。何枚も出来やへんもんだい、何とか仕事^{しごと}にな^なった。

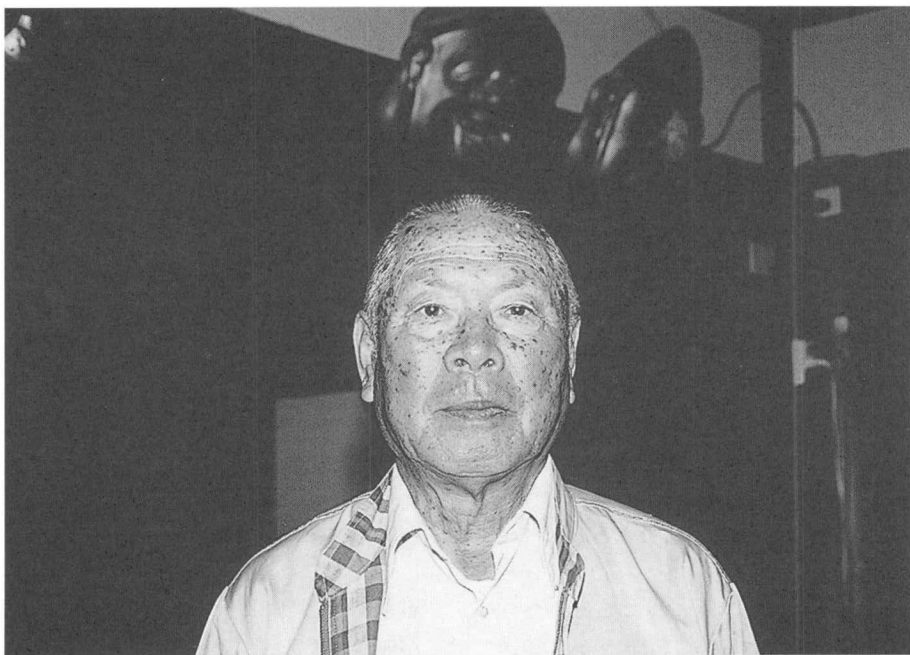
私は天窓を瓦製にしたのが曾根松の勘考だと思^{おも}っていたので、その前は何か材質^{そく}だったのかと尋^{たず}ねた。

あーへん。

思^{おも}わず、「無い?」と言^いっていた。「天窓自体が無^なかったんですか」。



第14図 天窓を持つ屋根 杉浦彦治家



第15図 二代目窓庄 杉浦彦治

うん、そう言う事。

名古屋なんか行くと軒がくっついとるげなもんだん、ガラス障子じゃ用を足さんわけ。こう狭いもんだで。ほいで6枚窓とかな。

あれを付けると、あの一、ガラス障子の一方振り、明かりが取れるという事だな。

天棚とか、天井とか、また破ってな。

だから、新築の為の需要が在っただけでなく、古い家も天窓を改造して取り入れたのであった。そして、家が建ち込む名古屋は大きな市場となったのである。

「暗い」でって、あの一、わしが等がはめ行った事もある。「屋根屋さん、一枚だけじゃ足らんで来てくれへん」って。

高いとこじゃいかんけどな。低い、この、あの一、何だったか、「晩、仕事済んでから、はめてあげらー」ってって。近くだったら、はめに行ってやったけどな。

「あそこ、欲しいけど」、なんて言われると、「ほいじゃ、やってやるわ」って。夏場の日の長い時は、仕事済んでから行ってはめてあげて。(第15図参照)

実際に昔の家で天窓が無い場合どういった状態になっていたか話してくれた。

お勝手が煙筒の無い家^{うち}は、お勝手がみんな炊きもんでやられたもんだい。煙だらけだもんだい。ほいだで、煙だいて、わしが作ったあいつが、ガラスはめる、あ

のこんな溝を掘って、ガラスをはめるようになったけど、あれ無しでな、上へ板をのして、ほいで、下から竹で、こうして開けて、ほいで、煙を出して使った。明かり取りじゃなしに。

家^{うち}でも向こうがお勝手で、昔は、みな、竈^{くど}で焚きもんくべとったもん。ずっとここへ来てって、ここら部屋が真っ黒け。

「部屋中に煙が流れていたわけですか」と聞くと、

うん、流れた。ほいだで、あの、何て言うだな、煙を出すあれを付けて。煙突をな。

確かに昔からの家の中へ入ると黒光りをしていてとても重厚な趣がある。もちろん使われている柱そのものが太い事もあるが、あの黒光りは、生活の煙が長年に渡って煤^{すす}として天井や梁その他に付いた物であったのである。それゆえに年中行事として年末に「煤払い」が日本全国行なわれていたわけである。

ところが、天窓は昭和63年(1988)をもって製造が中止に至っている。その直接の原因となったものが蛍光灯の登場であった。

売れ行きが悪くなったのは蛍光灯が出たからかな。

蛍光灯は好きなとこ付けれるもんな。

明るいもんな。

電灯は昔から在ったのだが、蛍光灯になって天窓は駆逐された事になる。天窓は昼光を屋根から入れることが生命であり、人々は喜んで取り付けた。電灯は確かに明るくはなるが、何処か赤暗い雰囲気になる。夕暮れの光

である。ところが蛍光灯は昼間のような明るさで部屋全体に行き渡る。それが電灯と蛍光灯の違いである。そして、この昼の明かりを生む蛍光灯は取り付けが簡単でしかも思うところに取り付けられる。此れゆえに、天窓はその役割を終えたのであった。

逆に言うと、蛍光灯が出る前までは天窓はとても重宝されたのである。事実、天窓は窓庄が一軒で独占的に作ってはいなかった。すでに曾根松の時代から天窓は他の工場でも生産されていたのである。さらにそういった天窓を作る人々が組合も組織して活動していた。

昔の組合の人がたはわしより、どうだや、うちの親父より年配の人がただな。組合で、4、5軒あったもんで。「昔はよ一儲かったな」って。「馬車一杯、あの一、引いてった瓦より、リヤカーで持ってた窓瓦の方が値が良かった」って。で、新川の人なんかは、川でみな積んで、あっちの方へ運ばされよったもんな。

昔は現代のように、特許権とか、知的所有権などといった考えは無かった。曾根松が考案した天窓は需要が多くなると、直ぐに他のところが真似て広がって行ったのであった。

あの一、お祖父さん（曾根松）が問屋売り込んだら、この下にあるけど、窓源さんという人があってな、窓始めたもんで、「窓源」って言うだけ。「彦蔵（屋号）さん、うまいもん作らしたな」って。

その人が職人4、5人、あの一、使って大々的に「窓源」っていう屋号で始められた。ほいでその弟子が、高浜で、窓清さんかな。

うん、ほれから、ま、つぶれちゃったけど、碧南でな、「窓辰」あん。ほれは、わし方の親父より大きかったな。

「窓辰」はその工場の規模も、本人の年齢も、曾根松よりも上であったという。

その人がたは川も近かったし、専門で。

天窓の需要は実際、雪だるま式に増えて行ったようである。現代のように様々なメディアを通して需要を作るのではなく、口コミが主であった。

ほや、まあ、あの一、京都、奈良、大きなとこ見て、瓦屋へ頼んで、「あれ、付けてくれ」って。貼り付けて。そういった風で、だんだん、段々……

このようにして、天窓の注文が次々に「杉浦彦蔵」へ来る様になって行った訳であった。しかし、曾根松は瓦屋であり、鬼板屋であり、さらに天窓を新たに始めたばかりであり、その対応に追われる事態になったのである。その解決策として、庄之助が天窓製造を専門とする「窓庄」を興して独立したのである。

家の方は鬼やら何やらやっつったもんで、専門でやれんもんだい。ほんで、家の方へ新家に出て、ほんで家は窓瓦専門でやるようになって。

そして、ちょうど、「杉浦彦蔵」で起こったと同じように、窓庄でも、そこで働いていた職人が仕事を覚えると、独立して自分の天窓の工場を持って製造を始めたのである。結果、曾根松の発明した天窓は、まず、内部から、鬼板と天窓をそれぞれ専門とする窯に分岐したことになる。その年は昭和8年(1933)

であった。この時、天窓用の窯が現在の杉浦彦治の地所に築かれ、窓庄が誕生した。その後、天窓の需要の伸びと共に、次々と天窓専門に作る工場がその外部に生まれていったのである。戦前にはその数が6軒になっていた。窓庄（高浜）、窓源（高浜）、窓清（高浜）、篠源（高浜）、窓辰（碧南）、丸文（碧南）がそのグループである。このうち丸文は販売のみで製造はしなかったという。昭和18年（1943）には戦争の悪化が国内にも直接及び始め、アメリカ軍による空襲が始まり、政府の指導で夜間の明かりの制限が厳しくなると天窓は製造中止に追い込まれる。つまり、天窓は昭和8年以降、わずか10年間で急激に広まって行ったことになる。天窓を作る工場の数の増大がその事を如実に物語っている。

戦後になって天窓生産が再開されたのであるが、実際に天窓を生産していたのは窓庄と窓清のみであった。この体制が蛍光灯の登場まで続き、最後まで続けたのは窓庄で昭和63年（1988）に製造を中止している。さらに、庄之助が築いた天窓用の窯は平成15年（2003）9月7日に解体されたのである。

戦前に天窓を作る工場が増えてくると、人々は窓瓦組合を作り、過当競争が起これないように窓瓦の価格を調整していた。会合は年一回で、現在高浜市のかわら美術館の直ぐ前の丘にある観音寺に集まっていた。

みな、わしの親父より年上の人ばっかだな、わしが一番若いもんだいな。下っ端で、「観音様、またお願いします」って借りに行ったり、ご馳走を頼んだり、（笑い）色々値上げる話もしてな。

毎年のように、一割か二割ぐらい上げてな。ほいだで、そういう、定価表を作ってな。間屋へ配ってな。

組合長ていうだか、長はあってねー様なもんだ。（笑い）

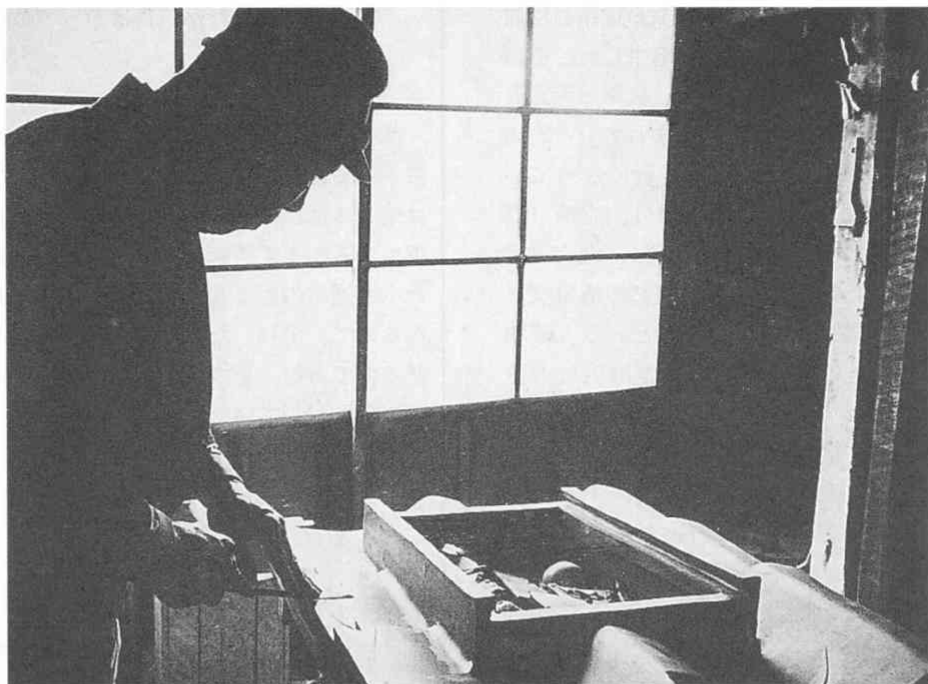
彦治は天窓の作り方を説明してくれた。大量生産ではなく、手作りである。多くの注文に応じるにはかなりの人手が必要とされる仕事である。まず天窓を作るには二人必要だという。通常の瓦よりもサイズが全体に大きくなるので、ずらしたり、運んだりする人手が要るのである。その役を窓庄の彦治の場合は妻の夏子がしていた。夫婦で天窓を作っていたのだ。

天窓の作り方

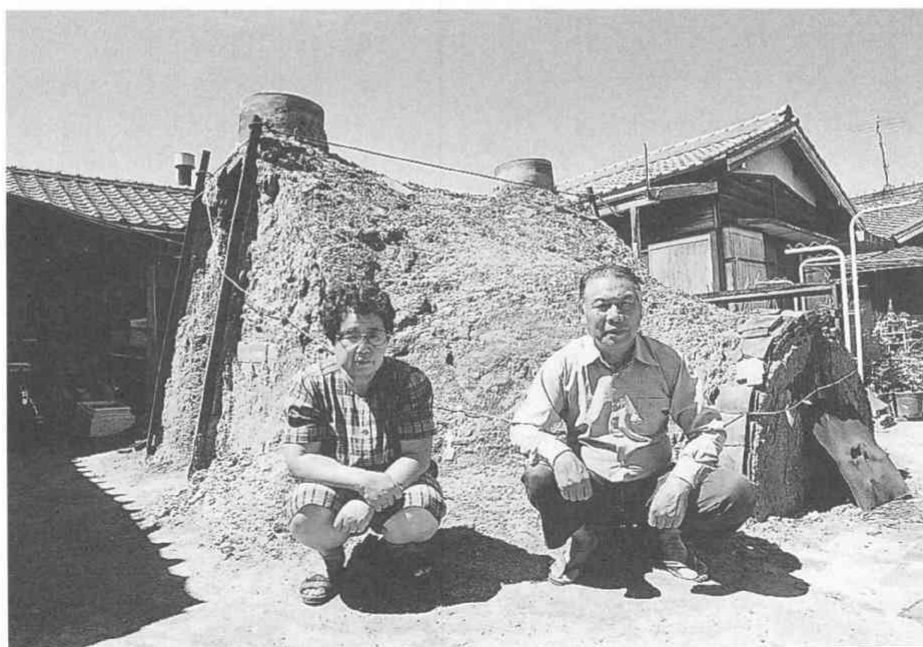
- 1) 生の瓦（通常の和瓦）をかけ破って作る。「かけ破る」とは、複数の瓦が重なり合う表と裏の面に刻みを入れて、ザラザラにし、水を打って「のた」を作り、貼り付ける事。「のた」とは瓦と瓦を貼り付ける糊のようなもの。白地（粘土）を水に溶かしてドロドロにしたもの。
- 2) 一方で、四角い枠組みを生粘土で作る。または円筒を生粘土（荒地）から作る。木の枠を置いて粘土の荒地を合わせた後、切って枠を作る。
- 3) 重ね合わせた瓦に四角（枠用）または円（円筒用）の穴を開ける。
- 4) 1)、2)、3)の工程でそれぞれ完成した生の状態の粘土を合体させる。

1)～4)の工程で天窓の成形が完成する。一日で6枚窓の場合、二人でやって5、6枚程度が限度だという。（第16図参照）

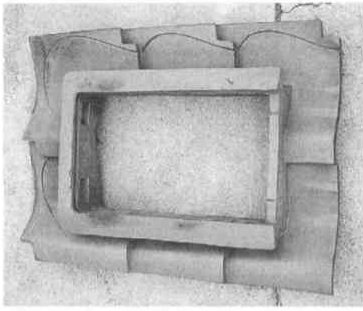
- 5) 乾燥させる。工場の土間に4～5日間半乾きになるまで家の中で乾かす。その後1～2日間、外で天日干しをして完全に乾燥させる。
- 6) 窯積み。窯の下から



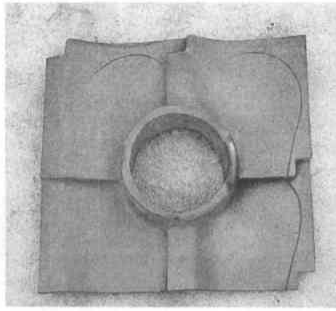
第16図 天窓作業風景（6枚窓） 杉浦彦治 昭和62年杉浦敏晴撮影



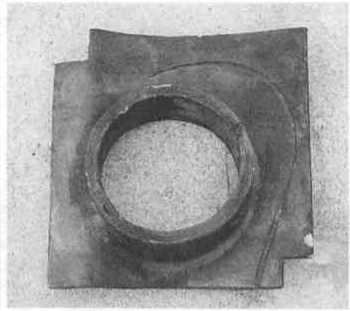
第17図 天窓窯 杉浦彦治・夏子 杉浦敏治撮影



第18図 6枚窓(天窓)



第19図 4枚煙突窓



第20図 1枚煙突窓

杉浦彦治作 杉浦敏晴撮影

第一層 6枚窓 3列×17=51枚。
 第二層 4枚窓 10~11枚。
 第三層 1枚窓と2枚窓を
 入れるだけ入れる。

18、19、20図参照)

ま と め

7) 焼成。

1. 朝、火を入れ24時間焼き続ける。8時間あぶり、8時間中焼き、8時間流し焼き。
2. 窯の上にある窓から温度を見て、1000度の火になったら火を止める。(1000度を超すと切れが入るため)
3. 焚口より松葉と松木を込んで、2、3時間燻す。
4. 丸4、5日寝かす。
5. 取り出し。

燃料はまず松木の炭を入れ、松葉に火を点けて、木っ端を入れて燻(かき)を作る。燻が出来たら石炭をくべていく。(第17図参照)

杉浦彦治が最後の天窓職人という事になる。天窓が祖父の曾根松によっていつ頃発明されたのかははっきりしていない。しかし、徐々に広がって行き、ついには「杉浦彦蔵」を鬼板専門と天窓専門の二つの窯に二分するほどに昭和の初めにはなった事になる。それを象徴する出来事が、庄之助の昭和8年に築かれた天窓窯である。現在はその窯はすでに無く、「まど庄鉄工所」としてその名前のみわずかに昔の記憶が刻まれている。(第

「杉浦彦蔵」そして「窓庄」は瓦屋が鬼板屋へ、さらには天窓屋へと変遷を遂げていった異色の鬼板屋である。全盛期は二代目杉浦彦蔵の時代である。この時には瓦屋、鬼板屋、天窓屋が同じ工場の中に同居し、生産されていた。全て手作りであったから、その工場は沢山の職人と様々な瓦で壮観な態を成していたものと思われる。この全盛期を築いたのが二代目杉浦彦蔵こと、杉浦曾根松であった。まず単なる瓦屋から自ら脱皮して鬼板師になり、屋根瓦の注文を一箇所ですべて賄える体制を作っている。全く鬼板を作る環境が無いところから鬼板の技術を習得する事は大変な努力と抜きん出た才能が必要である。現代では萩原製陶所の萩原尚が土管屋からプレス製の鬼板の職人、そして手作りの鬼板師へと進んでいる例が一つあるのみである。この萩原尚と似た様な事を明治時代に曾根松は行なった事になる。

曾根松の凄いところは、瓦屋と鬼板屋に加えて、全く新しい瓦を考案したことであった。「天窓瓦」である。この発明は日本人の家屋に明るい光をもたらした。当時(大正時代から昭和初期)は瓦屋が最も栄えていた時代であった。そこへ全く新型の瓦が登場し、



第21図 三州鬼瓦製造組合会合 昭和初期の鬼板師 料亭竹善にて (高浜町)

それが直接に日常の人々の暮らしを改善する事が明白になった時、高浜の瓦屋と鬼板屋の間に落雷のような衝撃が走ったのは確かである。それを成したのが高浜の鬼板師である杉浦曾根松であったから尚更である。文字通り人々の生活に光明が射したのである。いかに曾根松が鬼板師の間で高く評価されていたかは昭和初期に撮られた三州鬼瓦製造組合の会合の集合写真がはっきりと物語っている。曾根松は「杉浦彦蔵」として中央最前列に座してその両端が、左、鬼兵(石川兵次郎)、右、鬼源(神谷春義)である。それだけではない。最後列の左端には息子の杉浦庄之助が窓庄として同じ写真の中にいるのである。この事からして、この写真は年代が昭和8年以降

に撮られたものだという事も分かる。なぜなら庄之助は昭和8年に天窓窯を築いて「窓庄」に成っているからである。つまり、この写真の中には鬼板師で天窓師が二人いることになる。曾根松は三州鬼板屋組合の寵児であった事は疑いない。何しろ、あの高浜で最も古いと言われる鬼源の神谷春義が弟子である曾根松に中央の席を譲っているのである。まして時代は昭和初期である。席順は絶対であったと思われる。この写真はずっと以前から知っていた。しかし、なぜ鬼源が中央最前列にいないのか不思議に思っていた。今回、窓庄をフィールドワークして初めてその謎が解けた気がする。(第21図参照) 席順は次の通りであった。

- ・神谷春義（鬼源）右
- ・杉浦曾根松（二代目杉浦彦蔵）中央
- ・石川兵次郎（鬼兵）左

曾根松の次の代は天窓が急速に出始めた事もある。弟の庄之助が独立し、天窓専門の窓庄となる。兄の義正は鬼板師として「杉浦彦蔵」を継ぐ。ところがその次の代になるとなんと窓庄も「杉浦彦蔵」もそれぞれ家業を止めてしまうのであった。四代目杉浦彦蔵は杉浦久義が継ぎ、伊勢湾台風後（昭和34年9月26日）、鬼板屋を廃業して、発泡スチロールを作る会社に転業している。この時点で「杉浦彦蔵」は途絶えた事になる。一方、二代目窓庄となった杉浦彦治は昭和63年（1988）まで生産を続けている。しかし、蛍光灯が広まった事により、天窓は競争力を一気に失い、天窓そのものがその使命を終えたのであった。

参考文献

- 石田高子 1983年 『葦のうた』愛知県陶器瓦工業組合
 駒井綱之助 1963年 『粘土瓦読本』彰国社

- 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
 吹田市立博物館 1997年 『達磨窯』吹田市立博物館
 杉浦茂春編 1982年 『高浜市誌資料(六)』高浜市
 高原隆 2002年 「鬼師の世界——三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247
 —— 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189
 —— 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132
 —— 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)」『文明21』第12号：113-165
 —— 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号：155-175
 —— 2005年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎(3)」『文明21』第14号：97-111
 —— 2005年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208
 —— 2006年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116
 —— 2007年 「鬼師の世界——黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(1)」『文明21』第19号：55-72
 —— 2008年 「鬼師の世界——黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(2)」『文明21』第20号：79-100
 —— 2008年 「鬼師の世界——黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(3)」『文明21』第21号：73-95